

ともに悲しき「離散の民」 イスラエルとパレスチナ人、対立

の根源は

有料記事イスラエル・パレスチナ問題

聞き手・岡田玄 2023年11月18日



中東地域研究者の錦田愛子さん



Diaspora（ディアスポラ）。「あちこちに種をまく」というギリシャ語に由来する「離散」を意味する語は、長くユダヤ人を指した。しかし、ユダヤ人国家イスラエルの建国で、今度はパレスチナに暮らしてきたアラブ人が新たなディアスポラとなった。悲しき対立と衝突の根源を、中東地域研究者の錦田愛子さんに聞いた。

にしきだ・あいこ 1977年生まれ。慶応大学教授。専門は移民・難民研究、現代パレスチナ・イスラエル政治。ヨルダン、レバノン、イスラエルなどで在外研究の経験がある。

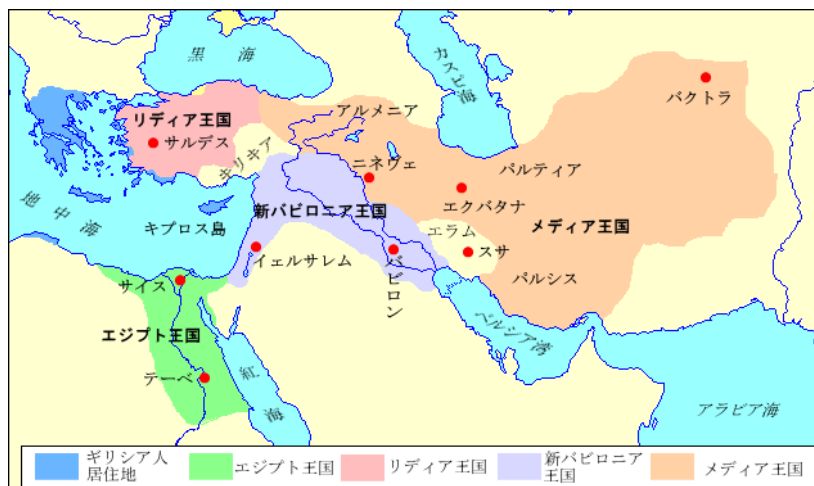
——1948年のイスラエル建国以来、争いが断続的に続いてきました。

「この争いを、ユダヤ教とイスラム教の対立と説明する向きもありますが、そう解釈すると見誤ります。確かに宗教が関わる面もありますが、これは**宗教的対立ではなく、土地とアイデンティティーを巡る争い**です」

「パレスチナとは元々、イスラエルを含む、この地域全体を指す土地の名称です」

「イスラエルの博物館に行くと、ユダヤ教が中心の社会があった古代から説明が始まります。ユダヤ教徒は新バビロニア王国（セム系遊牧民カルデア人が前625年、メソポタミアに新バビロニア王国を建国し、イラン高原のメディアと連合してアッシリア帝国を前612年に滅ぼした。新

バビロニアはバビロンを都にし、カルデア王国、あるいはバビロン第1王朝とも言われる。) **やローマ帝国**によってパレスチナの地を追われ、世界中に離散していきました。彼らは『ディアスポラ』(離散)の民とも呼ばれています」



「ユダヤ教を源流にキリスト教が誕生し、さらに7世紀にイスラム教が起こると、**パレスチナ**は主にイスラム教徒を中心とするアラブ人が暮らす土地になりました。周辺のエジプトやシリア、ヨルダンなども含め、**アラブ人にはユダヤ教徒もキリスト教徒も**います。この地域は本来、同様にエルサレムを聖地とする三つの宗教が共存する土地です。**パレスチナ**も、かつては中立的な地名でした。イスラエル建国以前、ユダヤ人がこの地で作った楽団が『パレスチナ交響楽団』を名乗ったほどです」

——その地に、ユダヤ人国家が建設されました。

「離散したユダヤ教徒たちは、キリスト教が根付いた**欧州では少数派の異教徒**として、ときに迫害を受けました。ナチスによるホロコースト(大虐殺)は、その象徴的な出来事です」

「一部のユダヤ教徒の間ではすでに**19世紀に**、**反ユダヤ主義**から逃れるため、**ユダヤ人の国家を作ろうとする『シオニズム運動』**が始まっていました。20世紀初めのパレスチナはオスマン帝国統治下でしたが、**大英帝国は第1次世界大戦を有利に進めるため**、**アラブ人と、ユダヤ人財閥の双方に**、**将来の国家建設を約束**するような『**三枚舌外交**』を展開したのです。約束はいずれも果たされませんでした。第2次大戦後に**ユダヤ人がイスラエルを建国**。反対するアラブ諸国との間で1973年までに4度の中東戦争が起きました」

「こうして建国されたイスラエルは、**ユダヤ人にとって重要な生存圏**とみなされています。すなわち**安全な国土の確保が最優先課題**なのです。今、イスラエルが強い国際批判を

受けながらも、それを半ば無視したように激しくガザ地区を攻撃しているのは、**10月7日の攻撃で『生存圏』が著しく脅かされた**ととらえ、**その脅威を徹底的に排除しようとしているから**です」

——イスラエル建国で、今度はアラブ人がパレスチナの地を追われました。

「オスマン帝国時代は、この地域一帯で人々が自由に移動をしていました。しかし**エジプト**や**シリア**など国民国家の形成が始まると、国民意識が生まれます。パレスチナを追われた人々は、逃れた先のほとんどの周辺国で国籍を得ることが出来ませんでした。**彼らは出身地域の名前から『パレスチナ人』と呼ばれ、難民となりました**」

「イスラエル建国を、アラビア語で『**ナクバ**』（**大災厄**）と言います。このナクバによる**離散という体験が、現在のパレスチナ人のアイデンティティーの根底にあります**。パレスチナ人もまた**離散の民、ディアスポラ**なのです」

——パレスチナ地域に住んでいた**アラブ人**が、ナクバという共通経験をもとに新たなアイデンティティーを構築し、今の「パレスチナ人」になった、と。

「彼らの中には、故郷を中心としたアイデンティティーが今も強く根付いています。以前、レバノンでパレスチナ難民への世論調査をしたのですが、その結果は大変興味深いものでした。『**帰れるならどこに帰りたいですか**』と尋ねると、**大半がパレスチナ自治区ではなく、イスラエル領内と答えました**。それは彼らの出身地がイスラエル領内にあるからです」

「この地域の建物は石造りで、何世代にもわたり住み続けられてきました。現在**レバノンに住むパレスチナ難民の故郷の家は、廃虚となってイスラエル領内にまだ残されています**。庭や畑で育てていたオリーブは大木となっています。それは、**彼ら自身がその土地に根づいていることを象徴する存在**です。イスラエルがブルドーザーで掘り返す光景がニュースなどでよく報じられますが、それは、**自分や先祖の存在証明を否定されるのと同じ意味を持つ**のです」

「ナクバで土地を奪われたという共通体験を持つ人たちが、『**架空の国民国家**』としての**パレスチナ国家を想像することで一体性を保っている**のです」

——それが今も続いている。

「イスラエル建国以来、75年にわたり、パレスチナ人にとっては占領が続いてきました。オスロ合意により95年にはヨルダン川西岸地区とガザ地区で自治が認められましたが、その後もイスラエルが入植地を拡大するなどの動きは続きました」

「一方、今世紀に入ると、イスラエルと自治区の間には壁が築かれ、ガザからユダヤ人入植地が撤退し、次第にイスラエル人とパレスチナ人の生活空間は分離されていきました。イスラエル人の多くは、パレスチナ人の存在を意識することなく暮らせるようになりました。近年では衝突も減り、いまのイスラエルの若者にとって占領は、どこか遠くの出来事のようなものになっていました」

——自国による占領により、新たな離散の民を生み出した自覚はなかったと。

「対立による衝突や危険が遠のいたことで、まだパレスチナ人との構造的な紛争下にあるということを忘れて、日常生活を送れるようになっていたのです。イスラエルはユダヤ人の安全な生存圏として確立された、という意識だったのでしょうか」

——そこに今年 10 月、ガザ地区を実効支配するイスラム組織ハマスら武装勢力による、大規模な**越境攻撃**が起きました。

「背景にあったのは、パレスチナ問題が忘れられていくことへの焦りで、**イスラエルだけでなくアラブ諸国や他の国々への強いメッセージも込められていた**ように思います。国連のグテーレス事務総長も今回、パレスチナ問題は長年放置されてきたと認めました。国際社会の関心の低下の中で、**実力行使により注意を呼び覚ます**という効果の面では、今回の展開は 87 年に起きた第 1 次インティファダ（民衆蜂起）に似ていると思います。それと同じ効果をハマスは狙ったのかもしれませんが」

「今回の攻撃の影響として長期的に懸念されるのは、これまでパレスチナ人との対話を可能と考え、共生を訴えてきたイスラエルの左派が、壊滅的打撃を受けるだろうということです。多くの民間人が殺害されたため、もうパレスチナ人とは対話できない、と考え始める人が多くなるのではないのでしょうか」

「イスラエルの国内政治は、長期政権となったネタニヤフ首相への賛否をめぐり激しく分断されていました。しかし、**突然舞い込んだ暴力で 1200 人もの命が奪われた。**それが、かつての離散や大虐殺の記憶と結びつき、平時は隠れている『ディアスポラ』という基層的な意識により、**イスラエル人の中の結束を強める**かもしれません」

——この対立に終わりはあるのでしょうか。

「両者のナショナリズムは、それぞれの過去の犠牲の上に生まれ、今日まで続いてきたものですが、自分たちの犠牲者性を強調しあう限り、紛争の終わりは見えません。**互いにそれぞれの国民として生存権を認めあう以外、解決の道はありません**」

「ただ、パレスチナ人にとっては、今の自治区は本来のパレスチナの一部でしかなく、パレスチナ国家ができて、そこは彼らの故郷ではないかもしれない。帰るべき土地で暮らせなければ意味がない、という思いは残ります。**イスラエル**としても、**パレスチナが国家として存在することを認めなければならない。互いに妥協が必要です**」

「戦闘や飢え、渇きなど生命の危機にさらされた状況では、相手への許しや妥協を想像することすら困難です。今は妥協点の模索から最も遠いところに来てしまいましたが、**せめて人間としての最低限の尊厳を、相互に認め尊重**する。長期的な共存の道を探るのは、そこからです」（聞き手・岡田玄）



にしきだ・あいこ 1977年生まれ。慶応大学教授。専門は移民・難民研究、現代パレスチナ・イスラエル政治。ヨルダン、レバノン、イスラエルなどで在外研究の経験がある。